

○天神坂

此の坂路は、天神町より小立野與力町への往來路にて、男坂・女坂等の三坂ありて、惣名をば天神坂と呼べり。

○阿彌陀清水

龜尾記に云ふ。小立野山の岐尾に坂路ありて、坂の上より流出づる清水をば、世人阿彌陀清水と呼べり。元文年間の記録に、田井邑けち清水といふ事も見たりと。又加賀古跡考にも此清水を記載して、阿彌陀清水の名いかなる謂れあらんか。いまだ詳かなる事を知らず。といへり。平次按ずるに、元文年間の記録といへるものは、元文三年の加州産物志の事なるべし。産物志に如左載せたり。

一、田井村領に清水御座候。あみだ清水と唱申候。

一、同村領に清水御座候。けちち清水と唱申候。但田地に水有之時分、又は冬之内水出申候。其外は出不申候に付、けちち清水と唱申由に御座候。

自餘略之

右石川郡産物如斯御座候。以上。

元文三年六月

田井村 吉郎 兵衛

右阿彌陀清水は、殊に靈泉にて、其の水源は天神坂の上なる地より流出で、其の下流坂下へ流れ出で、甚だ清き冷泉とて人賞美せり。その靈泉、いかなる大暑旱魃といへども絶ゆる事なく涌出すといへり。

○阿彌陀聖傳

扶桑略記に云ふ。村上天皇時。京洛有僧。其名空也。不言父母亡命在世。或云。出自演流。口常唱彌陀佛。故號阿彌陀聖。或住市中作佛事。又號市聖。過險路。即鑿之。當無橋亦造之。見無井則掘之。號曰阿彌陀井。とあり。往生極樂記にも此の事を記載し、其の文全く同文なれど、此の記には沙門弘也に作る。傳寫の誤りならんか。應永年中に撰述せし三國傳記卷六に云ふ。凡天慶より以前には、日本國に念佛三昧行稀なりしを、空也上人の御勸により、人舉りて念佛を申。常に阿彌陀佛を唱へて行給へば、世人阿彌陀聖りとも申けり。或は市の中に住して諸人の佛事を勧め、或は橋を渡して萬人を度し、水なき所には井を掘りて村里を潤し、法華と并て極樂往生の業とし給ひけりと云々。また今昔物語卷十六に、今はむかしある寺に、阿彌陀聖りと

いふことをして諸國修行の僧あり。鹿角つけたる杖の尻に、金をはめたるをつき、金鼓をたゝきて阿彌陀佛をすゝめゆきけり云々。と見わたる修行者は、彼の空也上人とは別僧なり。おもふに吾加賀國にも、いにしへさる修行者ありて、水道を初てつけたる清水なるにより、阿彌陀井とひとしく名付けたるならんか。

○金浦町

椿原神社の下より、田井口の町端までを、俗に出町と呼びて、田井の村地相對請地のヶ所なり。然るに文政四年二月、郡地のヶ所町奉行の支配と成り、此の時町名を初て金浦町と立てたり。金浦は此の地邊の郷名にてありし故、町名となしたるもの也。但し明治四年戸籍編成の時、いかなるゆゑなりけん。金浦町の町名を廢し、天神町一丁目と改稱す。按ずるに、文政四年よりの町名は、多分此の時廢止せられたり。

○金浦屋傳話

享保雜誌に云ふ。加州金浦村へ、關ヶ原陣前に、關東より毎年紙賣に來る者あり。此者片足なげだし也。金澤に毎度逗

留す。其比横山山城守の家人に、土田將監といふ者あり。此者の弟と彼紙賣と親敷成、折々參會す。或時商人云ふやう、御手前無息の事なれば、若し身の上かせぎに關東邊に下り候はゞ、必ず我名を申して本多上野介宅門番に可被尋。彼所へ出入の者也。必ずたよりに可成と云ふ。其後彼土田身の上かせぎに江戸へ出る。風と彼者事を思ひ付、本多上野介の屋敷に至り、門番に爾々の紙賣に逢度よしを申入ける處、心得候由にて奥へ案内し、彼者を召連れ、本多佐渡守の宅へ行き、佐渡守に對面す。于時加州へ毎年來りし商人は則佐渡守也。同人口入にて、安藤豊後守に仕へ、三百石を領し、子孫今に豊後守方に勤仕すと也。此事高野山無量壽院物語也。此無量壽院は、もと加州金浦の人也。子孫于今金澤材木町に、金浦屋某とて町人にて居住すといへり。按ずるに、金浦郷は今石川・河北兩郡へ跨りて、田井邊は則ち郷内也。漸得雜誌に、若松庄今改號金浦郷とあり。金浦村は進士修理亮晴舎記に載せたる、永祿二年十一月御内書符案に如左文案あり。